

十二分教と三蔵・二蔵との相摂関係について

——「大乘莊嚴經論」「大乘阿毘達磨集論」「瑜伽論」を中心として——

舟 橋 尚 哉

はじめに

① 弥勒の五部論の一つに数えられている「大乘莊嚴經論」(Mahāyānastrānikāra)は、偈頌は弥勒のもの、長行の部分は世親(又は無著)のものであるといわれている。

最近、私はこの「莊嚴經論」安慧釈を読んでいて、無著造「阿毘達磨集論」(Abhidharma-samuccaya)や安慧釋の「阿毘達磨雜集論」と解釈の異なるところがあることに気がついた。すなわち「莊嚴經論」求法品(漢訳は述求品)の初めの三蔵(經・律・論の三蔵)と九因は「撰大乘論」総綱要分の世親釈の、三蔵・二蔵の説の典拠として重要なものであるが、この三蔵・二蔵に対する「莊嚴經論」安

慧釈は、「阿毘達磨集論」並びに安慧釋「雜集論」の解釈と矛盾するのではなからうか。もし矛盾しないとすれば、どのように了解すべきであるかについて私見を述べ、更に⑤ 十二分教を三蔵・二蔵に配当する場合、唯識の諸論書中で相異があるようなので、この点についても考察しようと思

一

「莊嚴經論」求法品の初め⑥の世親釈は次の如くである。「求法品における所縁を求めるについての四偈がある。『蔵(Draka)は三あるいは二である。撰するからである。九因によって許される。それ⑦(三蔵あるいは二

蔵)は、熏習と覚悟と寂靜と通達とによって「人々を」解脱せしめる』(第一偈)

三蔵とは經と律と論とである。この同じき三「種」は劣乗と最勝乗との差別によって、二「種」となる。すなわち、声聞蔵と菩薩蔵とである」

これに相当する安慧積並びに無性積の中に次の如き解釈が見られる。すなわち安慧積には、

「その中、十二分教において、方広(vaipulya)と本生(jataka)との二は、菩薩蔵といわれる。その余のものは、殆んど声聞蔵である。なぜなら、殆んどと説かれているのは、余のものにおいては大乘と声聞乗と共通の特徴をもっているから、あるいは「共通の特徴が」あると説かれているからである」

とあるし、また無性積には、

「十二分教の中で、方広(vaipulya)と本生(jataka)は菩薩蔵である。余のものは殆んど声聞蔵である。なぜなら、殆んどと説かれているのは、ある支分は大乘と声聞乗と共通であるから」

と説かれている。ここには安慧積も無性積もともに「方広」と本性とは菩薩蔵であるが、その他のものは殆んど声聞蔵である。なぜなら、余のもの、ある支分は大乘と声聞乗

と共通のものであるから」と註釈されている。

二

さて、無著造「阿毘達磨集論」(Abhidharma-samuccaya)や安慧様の「阿毘達磨雜集論」には、十二分教に対する次の如き解釈が見られる。「阿毘達磨集論」には、

「かくの如く、經等の十二分聖教は三蔵に撰せられている。三とは何か。(一)經蔵と(二)律蔵と(三)阿毘達磨蔵とである。また、これらは二種あり、声聞蔵と菩薩蔵とである。……」

(1)契經(sūtra)と(2)広頌(geya)と(3)記別(vyākaraṇa)と(4)諷頌(gāthā)と(5)自説(udāna)と、これら五は声聞蔵の經蔵に撰せられている。(6)縁起(mūdana)と(7)譬喩(avadāna)と(8)本事(itivṛttaka)と(9)本生(jataka)と、これら四は二蔵の、眷属を具する律蔵(saparivāro vinayapitako)に撰せられている。(10)方広(vaipulya)と(11)希法(adbhutadharma)と、これらの二は菩薩蔵の經蔵に撰せられている。

(12)論議(ṃpadesa)の二は声聞と菩薩との「二」蔵の阿毘達磨蔵に撰せられている」

と説かれていて、「方広(vaipulya)と希法(adbhutadharma)とが菩薩蔵の經蔵である」といわれているが、このことは安慧様の「雜集論」でも、

「方広希法^①。此^②菩薩藏中、素怛纒藏^③撰^④」(大正三二、七四四上)

と説かれている。素怛纒は sutra (經) の音写であるから、「方広^⑤と希法とが菩薩藏中の經藏に撰せられる」ことは、「阿毘達磨集論」の所説と全く一致している。

三

安慧は Abhidharma-samuccaya (阿毘達磨集論) と Abhidharma-samuccaya-bhāṣya を集めて「阿毘達磨雜集論」を造ったから、「安慧釋」といわれるのであるが、近年の最勝子 (jinaputra) の Abhidharma-samuccaya-bhāṣya の梵本が発見され、近くインドより出版されることである。私は最近、この未刊の梵本を篠田ノートによって知る機会を得た。それによると、Abhidharma-samuccaya-bhāṣya ^⑥ adbhutadharmaṅgām bodhisatvasūtrapiṅke saṅgrahaṇam

(希法は菩薩の經藏に撰せられる)

とあるが、方広 (vaipulya) については漢訳に、

「方広者。文義広博正菩薩藏」(大正三一、七四四上)

とあるのに、これに相当する Bhāṣya は篠田^⑦ノートによる

限り欠けているようである。しかし Bhāṣya には十二分教の一一を説くところで、

「方広 (vaipulya) ・ 広破 (vaidyā) ・ 無比 (vaidulya) と云う、これらは大乘の異名である」

とあるから、「方広と希法とが菩薩藏の經藏である」と説く「阿毘達磨集論」(Abhidharma-samuccaya) の所説と一致している。従って「阿毘達磨集論」や安慧釋「雜集論」による限り、「方広と希法とは菩薩藏」ということになるが、このことは「大乘莊嚴經論」の安慧釈の所説と矛盾しないであろうか。

先にも述べた如く、「莊嚴經論」の安慧釈では、

「十二分教の中で、方広と本生とは菩薩藏であり、その他のものは殆んど声聞藏である」

と説かれていた。方広については「集論」も「雜集論」も菩薩藏としているから問題がないとしても、もう一つを「集論」のように「希法」とせず、「本生」を菩薩藏としているのはどうしてであろうか。安慧は「集論」と Bhāṣya とによって「雜集論」を造った人であるから、もし「雜集論」を先に造っていて、後に「莊嚴經論」に註釈したとすれば、「方広と本生」とを菩薩藏とはせず、「方広と希法」とを菩薩藏としそうに思われる。(それとも

「莊嚴經論」に註釈した後に、「雜集論」を造ったのであろうか。

四

この点について私は「阿毘達磨集論」の本文に注目したい。すなわち「集論」では、本生と方広とを説明して次の如く説かれている。

「本生とは何かといえ、菩薩行と相応するものである。方広とは何かといえ、菩薩蔵と相応するものである。」

ここに「菩薩行」「菩薩蔵」と説かれているから、「莊嚴經論」の安慧積・無性積は本生と方広とを菩薩蔵としたのではなからうか。あるいはこういう解釈が伝統的であつて、それを見ているのかもしれない。「嚴密にいえば、本生は菩薩行であつて菩薩蔵とはなっていない。この Pradhān 還元梵語は、おそらく漢訳に「菩薩本行蔵」(大正三一、六八六中)とあるのを見て、bodhisattvacarītipiṭaka (菩薩行蔵)と還元したと思われる。」

また「莊嚴經論」の安慧積や無性積には、「その余のものは、殆んど声聞乘である」と説かれているが、その直後に「殆んど説かれているのは、余のものは大乘と声聞乘と共通であるから」とあるから、「方広と本生」以外のもの

の(例えば希法)でも、大乘(菩薩蔵)的な要素を具していてもよいと理解できるのではなからうか。そう考えれば、「莊嚴經論」の安慧積・無性積の記述と「阿毘達磨集論」等の所説とは、一見矛盾しているようではあるが、よく考えて見れば矛盾していないことになるのではなからうか。

五

ところで Abhidharmasamuccaya-bhāṣya の方広(vaiṣṭya)を説くところには、次の如き七種の大性が説かれている。

「七種の大性は、(1)所縁の大性とは、菩薩道の、十方〔頌般若〕等の無量の經の教法を所縁とする故に、(2)行の大性とは、すべての自利利他の〔行を〕行ずる故に、(3)智の大性とは、人法〔二〕無我を知る故に、(4)精進の大性とは、三無教劫において多くの百千の難行を行ずる故に、(5)方便善巧の大性とは、生死と涅槃とに住しない故に、(6)証得(pāpī)の大性とは、〔十〕力と〔四〕無所畏と〔十八〕不共佛法等の、無量無数の功徳を証得する故に、(7)業の大性とは、生死(輪廻)のある限り、菩提等を示現するによって仏の事業を実行する故に、と」

この七種大性は「中辺分別論」の安慧釈にも説かれて
 いるが、七種大性の一一の解釈は殆んど同じである。

そして山口博士も指摘しておられる如く、この七種大性
 はすでに「大乘莊嚴經論」功德品第五十九偈・六十偈、並
 びにその長行に次の如く説かれている。

「(1)所縁の大性と(2)また「自利利他の」兩者の行の「大
 性」と(3)智の「大性」と(4)精進を發起する「大性」と
 (5)方便善巧の「大性」と、 (第五十九偈)

(6)証得 (udgama) の大性と(7)仏の事業の大性とである。
 この大性と相應するから、実到大乗といわれる。

(第六十偈)

七種の大性と相應するから大乘といわれる。(1)所縁の大
 性によって、無量の広大な (vāṭṭā) 經等の法と相應す
 る故に。(2)行の大性によって、自利と利他において兩
 者の行「と相應する故に」、(3)智の大性により通達した
 ときに (prativēdhakāle)、人無我と法無我との二を知る
 故に、(4)精進を發起する大性によって、三無數劫の間、
 恒に恭敬して加行する故に、(5)方便善巧の大性によって、
 輪廻を捨てずして不染汚なる故に、(6)証得 (samudāgama)
 の大性によって、「十」力と「四」無所畏と「十八」不
 共仏法を証得する故に、(7)仏の事業の大性によって、再

三、等正覺と大般涅槃とを示現する故に」

大乘莊嚴經論の七種大性の記述も、中辺分別論の安慧釈
 や Abhidharmasamuccaya-bhāṣya の記述とほぼ一致して
 いるが、第六の「証得の大性」の「証得」のサンスクリッ
 トは、Abhidharmasamuccaya-bhāṣya や中辺分別論の安
 慧釈では prāpti (Tib. thob pa) となっているが、莊嚴經論
 では samudāgama (Tib. yan dag par ṅgrub pa) が用いられ
 ている。従って、莊嚴經論において「証得」の原語は sa-
 mudāgama であつたのに、最勝子「の Bhāṣya」や安慧に
 なると Prāpti が用いられるようになったと解すべきであ
 ろう。

また瑜伽論卷四十六や頭揚聖教論卷八でも七種大性を説
 いてはいるが、その内容は(1)法大性(2)発心大性(3)勝解大性
 (4)増上意樂大性(5)資糧大性(6)時大性(7)円証大性であつて、
 莊嚴經論や Abhidharmasamuccaya-bhāṣya や中辺分別論
 の安慧釈に出ている七種大性とは内容的に異なる。しかし
 第一の法大性について、

「一者法大性。謂十二分教中菩薩藏。撰三方広之教」
 (大正三〇、五四八下)

と説かれ、また頭揚聖教論では、
 「一法大性。謂十二分教中菩薩藏所撰方広之教」(大正三

一、五二〇ト)

と説かれているから、十二分教中の菩薩藏である方広(vai-pulya)との関連性が強調されている。ちなみに Abhidharma-samuccaya-bhāṣya の七種大性の説かれ方を見ると、十二分教の一一について説明する中で、

「方広・広破・無比という、これらは大乘の異名である。それ(方広)は、この七種大性と相応する故に大乘といわれる」

といて、七種大性が説かれている。それ故 Bhāṣya と瑜伽論とでは、七種大性の内容は全く異なるが、そこには何か関連性があるようにも思われる。(瑜伽論と顕揚聖教論との所説は全く一致している。)

六

さて十二分教を三藏・二藏に配当する場合、阿毘達磨集論(Abhidharma-samuccaya)では、先に述べた如く、

○ 声聞藏中の経藏……(1)契経(sūtra)、(2)応頌(geya)、(3)記別(vyakarana)、(4)諷頌(gāthā)、(5)自説(udāna)

○ 声聞と菩薩との二藏中の律藏……(6)縁起(nidāna)、(7)譬喩(avadāna)、(8)本事(itivṛtaka)、(9)本生(jātaka)
○ 菩薩藏中の経藏……(10)方広(vaipulya)、(11)希法(adbhū-

tadharma)

○ 声聞と菩薩との二藏中の阿毘達磨藏……(12)論議(upadeśa) といわれるが、瑜伽論ではこの配当の仕方が少し異なっている。

瑜伽論の声聞地(Śrāvakabhūmi)によれば、
「その中、ともかくも契経(sūtra)と応頌(geya)と記別(vyakarana)と諷頌(gāthā)と自説(udāna)と譬喩(avadāna)と本事(vṛtaka = itivṛtaka)と本生(jātaka)と方広(vaipulya)と希法(adbhutatadharma)と説かれたもの、これらはともかくも経(sūtra)である。」

また因縁(nidāna)と説かれたもの、これは律(vinaya)といわれる。

また論議(upadeśa)と説かれたもの、これは論(abhidharma)といわれる」

と説かれているが、この十二分教と三藏との相撰関係は、漢訳やチベット訳とも一致している。漢訳すなわち瑜伽論卷二十五(玄奘訳)には、

「当知此中若説契経応頌。記別諷頌。自説譬喩。本事本生。方広希法。是名素怛纒藏。若説因縁。是名毘奈耶藏。若説論議。是名阿毘達磨藏。是故如。是十二分

教。三藏所撰」(大正三〇、四一九上)

と説かれているが、ここに素怛纒とあるのは sūtra (經)の音写であり、毘奈耶は勿論 vinaya (律)の音写であるから、經藏・律藏を意味する。また因縁は nidāna の訳で「集論」や「雜集論」では縁起と訳されていた語である。この瑜伽論の所説を、先の阿毘達磨集論 (Abhidhammasam-

十二分教と三藏・二藏の關係

〔瑜伽論〕

〔阿毘達磨集論〕

〔大乘莊嚴經論、安慧積・無性積〕



uccaya) や大乘莊嚴經論の安慧積・無性積の所説と比較対照させると次の如くなるかと思う。(上記の表参照)

また瑜伽論と關係が深いといわれる頭揚聖教論にも十二分教が説かれているが、瑜伽論の所説と全く同じである。

頭揚聖教論卷六には、

「如是十二分教中具有経律阿毘達磨藏。此中所説契経応頌記別諷頌自説譬喩本事生方広未曾有法是為経藏。此中所説縁起是為律藏。此中所説論議是為阿毘達磨藏」

(大正三一、五〇九七)

とあって希法が未曾有法となっているが、大正藏經の脚註には異本に希法とあったことを記している。いづれにしても、adhutadhama の訳と考えられるから、頭揚聖教論の所説は瑜伽論の所説と全く一致しているといえよう。

七

菩薩藏 (大乘莊嚴經論、安慧積・無性積)

一般に十二分教の中で、因縁 (nidāna) と譬喩 (avadāna) と論議 (upadeśa) とを除いたものを九分教というが、

④ nidāna を除くかわりに udāna を除く説や、また udāna, vyākaraṇa, vaipulya を除く説もある。そして九分教と十二分教とでは九分教の方が古い形態ではないかといわれている。これらの九分教や十二分教は、従来「律」(vinaya) に対する「法」(dhamma = dharmā) すなわち「經」(sutta = sūtra) と考えられてきた。しかし前田博士は、そういった考えの出できた根拠に一一検討を加え、「九分十二分教の法は律を含むものである」と結論されている。従って「九分十二分教は「法」すなわち仏陀所説の教法の分類にほかならない」ということになる。

十二分教はこのように仏陀の教法であるが、それらの中から upadēsa を論蔵に、nidāna を律蔵に配当し、その他を經蔵に配当して分類したのが「瑜伽論」声聞地の所説であると思われる。瑜伽論の声聞地では upadēsa を説明して、「論議」(upadēsa) とは何か。一切の摩咀履迦(マイトリカ)(māttka 論母)であり、阿毘達磨であり、經(ニカヤ)「の本質」を抽出し(niskarsa)、經を解釈するは論議(upadēsa)とされる」と説くところから、upadēsa を論「蔵」に配当することにはあまり問題がないと思われるが、nidāna が何故、律「蔵」に含まれるのであろうか。瑜伽論の声聞地では nidāna を説明して、

⑤ 「因縁(nidāna 縁起)とは何か。人の名「字」と種姓を稱讚して、標挙して(uddiṣṣya) 説かれたもの、および律に關係のある有因(soppatitika)・有縁の別解脱經(patitikoṣa 波羅提木叉)、「これが因縁(nidāna)といわれる」と説かれている。nidāna (因縁)には因縁物語という意味もあるが、律蔵の中には具体的な聖典の一部を nidāna と呼ぶ例が見られ、また学処制定の由来を説く因縁も考えられる。瑜伽論の声聞地で説かれている nidāna は、これら律蔵と關係を有する nidāna である。

八

十二分教と三蔵との相撰關係の上で、阿毘達磨集論(Abhidharma-samuccaya)と「瑜伽論」声聞地との所説の大きな違いは、avadāna と itivittaka と jātakā とを律蔵とするか否かの違いである。すなわち「集論」では、これら三支を律蔵とすに対して、「瑜伽論」声聞地では經蔵としている。しかし nidāna については両論とも律蔵としている。

最勝子の Abhidharmasamuccaya-bhāṣya によれば、⑥「nidāna (縁起)は有因(soppatitika)であって、学処を制立することを説いたものの撰であり、律蔵である。

avadāna (譬喩) 等はそれの眷属(伴うもの)と知らるべきである」

と説かれているから、nidāna は瑜伽論の所説と同じく律蔵である。しかし avadāna 等は、それ(律蔵)の眷属、それに伴うものという意味で律蔵に含ましめられるようになったと思われる。

次に jātaka と avadāna との違いについては、岩本裕博士が、「アヴァダーナ『ジャタカ』を論ずる中で閑説しておられるが、赤沼教授もこのことに関して「仏教經典史論」において言及されているところもあるので、赤沼教授の研究も見逃してはならないと思う。

ま と め

「莊嚴経論」の安慧釈・無性釈を読んでいて、莊嚴経論では「方広と本生との二は菩薩蔵といわれる。その余のものは殆んど声聞蔵である」とあるのに、「阿毘達磨集論」では「方広と希法との二は菩薩蔵の経蔵に撰せられてい」と説かれており、両論の所説は一見矛盾するのではないかとという疑問から出発し、十二分教と三蔵(経、律、論)と二蔵(声聞・菩薩)との相撰関係について、初期唯識論書を中心に考察をすすめてきたが、その中で「瑜伽

論」と「阿毘達磨集論」とでは、明らかに十二分教の三蔵への配当の仕方は異なっていた。

また七種大性は「中辺分別論」安慧釈に説かれているが、サンスクリットが欠けているところがあり、その個所は山口博士の還元梵語によって補われている。しかし Abhidharma-samuccaya-bhāṣya のサンスクリットは篠田ノートルによって知ることが出来、七種大性についてのみならず、Abhidharma-samuccaya-bhāṣya の梵本^{補註}が出版されれば、初期唯識思想の研究は飛躍的に進むであろう。特に阿毘達磨思想との関連を知る上にも、また唯識思想の成立を考察する上にも、「阿毘達磨集論」の研究は今後の重要な課題の一つであると思う。(昭和五十二年五月脱稿)

註

- ① 山田龍城博士「梵語仏典の諸文献」一二五頁参照。
- ② 宇井伯寿博士「大乘莊嚴経論研究」一頁―二頁参照。
- ③ 袴谷憲昭氏「大乘莊嚴経論」散文箇所著者問題について(駒沢大学仏教学部論集第四号)によれば、「莊嚴経論」の散文、すなわち長行の部分は無著のものであるという。私も「莊嚴経論」の長行の部分は、「唯識二十論」「唯識三十頌」の著者である世親とは別人であると思う。(この点については別の機会に論じたいと思っている。)

④ 宇井博士「大乘莊嚴経論研究」六一―三頁参照。

長尾雅人博士「撰大乘論世親釈の漢藏本対照」(東方学報

京都第十三冊(二分) 一三二頁—一三七頁参照。

⑤ 十二分教や九分教については、前田恵学博士「原始仏教聖典の成立史研究」一八一頁—五四九頁に詳しく論ぜられてゐる。なお「十二部経」といういい方もあるが、今は林屋友次郎博士や前田恵学博士の説によつて「十二分教」を用う。

(前田博士「同書」一九七頁註③参照。)

袴谷憲昭氏「Asaṅga の聖典觀」(曹洞宗研究員研究生研究紀要第四号) 一五九頁参照。

⑥ 一般には世親釈といわれているので、一応世親釈として論をすすめるが、袴谷氏のいわれるように無著釈と考えた方がよいのかもしれない。

⑦ S. Lévi: *Maḥāyāna-sūtrālamkāra* p. 53, l. 14 参照。

⑧ 宇井博士「大乘莊嚴經論研究」一九一頁参照。

⑨ チベット訳では「藏は三にも二にも相応する」とある。

⑩ 宇井博士訳は「それから解脱せしめる」とあるが、チベット訳によつて「それは」と訳した。

⑪ チベット訳北京版には「二」とあるのみであるが、テルゲ版に「二種」とあるので、「種」を補つて訳した。

⑫ 影印北京版108巻269—2—8—3—2参照。

⑬ 北京版は smos pas であるが、テルゲ版は smos pa となつてゐる。(無性釈は北京版・テルゲ版とも smos pa である。)

⑭ 影印北京版108巻15—1—6参照。

⑮ P. Pradhan: *Abhidharma-samuccaya of Asaṅga* (Santikeran 1950) p. 79, l. 9 参照。この箇所は Gokhale の梵文断片 (Gokhale: *Fragments from the Abhidharmasa-*

muccaya of Asaṅga 1947) には見出されなから、Pradhan の還元梵語であろう。

* Pradhan の還元梵語については、漢訳にあまりにも近すぎるので、いろいろ非難もあるが、今は便宜上このテキストによつた。

W. Rahula: *Le Compendium de la Super-Doctrine* (Philosophie) (*Abhidharmasamuccaya*) D'Asaṅga, paris 1971, p. 133, l. 4 参照。

大正三一、六八六中—六八六下参照。

⑯ 影印北京版112巻264—3—5参照。

⑰ チベット訳では hdi dag ni (これは) となつて、十二分教という語はない。

⑱ 「三とは何か……菩薩藏である」の文はチベット訳にはない。

⑲ 「二藏の」はチベット訳にはない。

⑳ Pradhan 本 p. 79, l. 14 によつて訳した。漢訳は「此四二藏中毘奈耶藏并眷屬撰」(大正三一、六八六中—下)とあり、毘奈耶とそれ(毘奈耶)の眷屬と理解されている。そして、チベット訳でも「縁起と譬喩と本事と本生を眷屬として具するそれは律藏である」(影印北京版112巻264—3—7)と読めるようであるが、そのように理解すべきことは、この Bhāṣya にしても知られ、また、私達は Tatia 本にこの Bhāṣya のサンヌタリヤを知ることから、nidānam sotpatikaśikṣaprajñāpīṭhāśītasangghītan vinayapīṭakam, avadānādīkan tasya parivāro vedītav-yaḥ | (Tatia 本 p. 96, l. 13)

〔縁起は有因 (soḥpatṭika) であって、学処を制立することを説いたものの撰であり、律蔵である。譬喩等はそれに伴うもの (眷属) と知らるべきである。〕
 * soḥpatṭika は瑜伽論菩薩地 (获原本二一九頁五行目) にも出ているが、宇井博士は「生起を有する、其時初めて制定せられて起るの意味である」(梵漢対照菩薩地索引参照) としておられる。

* Śīksāprañāpiti に相当するチベット訳は *bslab bcas pa* (有学) である。Tatia 本 p. 95, l. 23~l. 24 及びその漢訳「制立学処」によって訳した。

この Bhāṣya から縁起 (nidāna) は律蔵であり、譬喩等〔の三〕は、その (律蔵) に伴うもの (parivāra) と理解すべきであることが知られる。

①9 チベット訳には *sin tu rgyas pa dan | rmad du byun bali chos gan | hdi ni byan chub sems dpahi sde snod do* (= (影印北京版 113 卷 198—2—2) 「方広と希法との、これらは菩薩蔵である」とある。

②0 平川彰博士「菩薩蔵経と宝積経」(宗教学研究第四十五卷第二輯二〇九号) 二〇頁参照。

②1 篠田正成氏の手書きのサンسكريットテキストである。私には幸いこの梵本を見る機会に恵まれたが、ここに篠田正成氏の御好意に心から感謝の意を表します。

②2 Tatia 本 p. 96, l. 14 参照。

②3 影印北京版 113 卷 118—3—6 参照。

Tatia 本 p. 96, l. 3 参照。

前田惠学博士「原始仏教聖典の成立史研究」三九三頁—三

九四頁参照。

②4 本文二八頁並びに二九頁註②参照。

②5 本文二八頁参照。

②6 影印北京版 112 卷 264—3—1 参照。(デルゲ版も全く同じ。) この Pradhan の還元梵語と思われるので、チベット訳より和訳した。

P. Pradhan: *Abhidharma-samuccaya* p. 78, l. 23~p. 79, l. 2 参照。この個所は Bhāṣya が欠けているが、安慧釋「雜集論」に相当するチベット訳 (影印北京版 113 卷 197—5—6) も「集論」のチベット訳とはほぼ一致している。

W. Rahula: *Le Compendium de la Super-Doctrine* (Philosophie) (*Abhidharmasamuccaya*) D'Asāṅga p. 132, l. 17 参照。

②7 P. Pradhan: *Abhidharma-samuccaya* p. 78, l. 23 参照。
 W. Rahula: *Le Compendium de la Super-Doctrine* p. 132, l. 17~l. 19 の仏訳も Pradhan の還元梵語と漢訳にほぼ同じように思われる。

②8 二八頁参照。

②9 二八頁参照。

③0 Tatia 本 p. 96, l. 4 参照。

③1 「教法を所縁とする故に」の篠田ノートは *desanādharm-āraṇbanād* (Tatia 本 p. 96, l. 5) である。Tib. *dstan pañi chos la dmigs pañi phyir* を参照して訳した。

③2 漢訳には「諸仏事」(大正三十一、七四四—) である。

③3 S. Yamaguchi: *Madhyāntavibhāṅgāṭīkā* p. 200, l. 20 参照。

山口博士「中辺分別論積疏」三二〇頁参照。

- ㉔ 異なる $\text{madhyantavibhagatika}$ と prati-patitah (p. 200, l. 23) bhāṣya が、篠田ノール prtipateh (Tatia p. 96, l. 7) 釈疏と $\text{bodhyabhisandarsanena}$ (p. 201, l. 1-4. 2) が篠田ノール $\text{bodhyādisandarsanena}$ (Tatia p. 96, l. 10) bhāṣya の anantastūtra (p. 200, l. 22 山口博士還元梵語) が篠田ノール sūtrāparimita (Tatia p. 96, l. 5) となっている位である。しかしこれらは伝承の梵文原典の違いと考えられる。ちなみに釈疏の anantastūtra のチベット訳を見る $\text{mdo sde mthah yas pa}$ (10巻187-1-4) であるが、 bhāṣya のチベット訳は $\text{mdo sde bskyaṅ du med pa}$ (113巻113-1-1) となっている。
- ㉕ 山口博士「中辺分別論釈」三二二頁⑤参照。
- ㉖ S. Lévi: *Mahāyānasūtrālaṅkāra* p. 171, l. 10 参照。
- ㉗ 宇井博士「大乘莊嚴論研究」五二七頁参照。
- ㉘ Sk. karma であるが「事業」という訳は、漢訳に「事」とあること、チベット訳に hphrin las とあることにより訳した。
- ㉙ 「莊嚴論」功德品第六十偈の偈文中では udāgama となっているが、これはシラノルの関係で sam が省略されているのであろう。ちなみにチベット訳を見ると、偈文も長行も yan dag hgrub pa となっている。
- ㉚ 大正三〇、五四八下参照。
- ㉛ 大正三一、五二〇下参照。
- ㉜ Tatia 本 p. 96, l. 3 参照。
- ㉝ 影印北京版 113 卷 118-1-2-1-8 参照。
- ㉞ 本文二九頁並びに注②参照。
- ㉟ 本文二八頁参照。
- ㊱ K. Shukla: *Srāvakaḥmi* (Patna) 1973, p. 139, l. 11 参照。
- ㊲ A. Wayman: *Analysis of the Srāvakaḥmi Manuscript* 1961, p. 78, l. 4-7. 8 参照。
- ㊳ 影印北京版 110 卷 63-1-1-3 参照。
- ㊴ 大正三一、五〇八頁並びに五〇九頁の闕註参照。
- ㊵ 前田惠学博士「原始仏教聖典の成立史研究」一八八頁参照。
- ㊶ 平川彰博士「インド仏教史上巻」一〇〇頁-一〇二頁参照。大般涅槃經(慧嚴等訳、南本)もこの説を採っている。「謂修多羅。祇夜・受記・伽陀・優陀那・伊帝目多伽・闍陀伽・毘佉略・阿浮陀達磨。以如是等九部經典」(大正二二、六二三中)
- ㊷ 大集法門經卷上
「謂契經祇夜記別伽陀本事本生緣起方広希法如。是等法」云々(大正一、二二七中)
- ㊸ 法華經の説であって、十二分教を知った上で重要な三支を取り出し、残る九支をもって九部法と称したのではないかといわれている。(前田惠学博士「原始仏教聖典の成立史研究」二一四頁参照。)
- ㊹ 平川彰博士「インド仏教史上巻」一〇一頁参照。
- ㊺ 前田惠学博士「原始仏教聖典の成立史研究」四八二頁-四八六頁参照。
- ㊻ 同書 一八九頁参照。
- ㊼ 同書 一九二頁-一九三頁参照。

- ⑤⑥ 同書 一九五頁参照。
- ⑤⑦ K. Shukla : Śrāvakaḥḥmi p. 139, l. 7 参照。
A. Wayman : Analysis of the Śrāvakaḥḥmi Manuscript p. 77~p. 78 参照。
影印北京版110巻63—1—2参照。
- ⑤⑧ Wayman 氏 The Abhidharma—the 'alphabet' of all [sūtras] (p. 78) と訳しているが、「一切」を「一切の経」と解してちがひかどうか私には疑問である。なぜなら「チン」訳ではそのように解してゐるが、思うられるから。
校部博士「俱舍論の研究」(界・根品)二三頁以下参照。
サンスクリットテキストは sarvamātrika abhidharmah (p. 139, l. 7) であるのべ、このように訳したが、チンと訳せば「パートリカーの如き阿毘達磨」(影印北京版110巻63—1—2)と訳してゐるが、思われぬ。ma Itā bu (チンが版も同じ) だ ma mo Itā bu の意である。
- ⑤⑨ A. Wayman : Analysis of Śrāvakaḥḥmi Manuscript p. 78 以下 which extracts the main points of the sūtra texts 上記の如し。
- ⑤⑩ K. Shukla : Śrāvakaḥḥmi p. 138, l. 2 参照。
A. Wayman : Analysis of the Śrāvakaḥḥmi Manuscript p. 77, l. 1 参照。
影印北京版110巻62—5—2参照。
- 〔附記〕 校正の段階で N. Tatia : Abhidharmasamuccaya-bhāṣyam (Patna 1976) が出版されたことを知ったので、すぐ入手して、その頁数を挿入した。
- ⑤⑪ 前出(註⑩参照)
- ⑤⑫ 前田博士「原始仏教聖典の成立史研究」四四二頁以下参照。
- ⑤⑬ 同書 四四六頁参照。
- ⑤⑭ 同書 四四六頁—四四七頁参照。
- ⑤⑮ 本文三三頁参照。
- ⑤⑯ 本文二八頁参照。
- ⑤⑰ Tatia 本 p. 96, l. 13 参照。
註⑩参照。
- ⑤⑱ 前田博士「原始仏教聖典の成立史研究」三七五頁註⑩参照。
岩本裕博士「『アヴァターナ』シヤタカ』について」(東洋学報第四十四巻第四号一〇〇頁)参照。
岩本裕博士「東方界」No. 6「実は、シヤータカとアヴァターナの区別をいいたしたのは私が最初なんです」(十一頁参照)。
赤沼教授「仏教経典史論」一七四頁—一七五頁参照。
- ⑤⑲ 補註 1 N. Tatia : Abhidharmasamuccaya-bhāṣyam (Patna 1976) 最近 Jayaswal Research Institute より出版された。
- ⑤⑳ 補註 2 新刊の Tatia 本にもなごうとある。(p. 96, § 120 参照)
- ㉑ 補註 3 補註 1 参照。

(本学専任講師 仏教学)